

キム ハク シン

金学順さんの思いをつなぐ

金学順さんは、1991年8月14日に名乗り出たのち、同年12月6日には日本政府に謝罪と賠償を求める裁判の原告となりました。初来日の際に宿泊したのはwamと同じ敷地内にある「早稲田奉仕園」で、畳を見てぞつとしたといいます。金学順さんは、6年後の1997年12月16日に亡くなるまで、病気や体調の悪化と闘いながら、日本政府が事実を認めて謝罪することを求めて何度もなく来日しました。

そんな金学順さんを近くで支えていたのが李熙子さんです。李熙子さんご自身も遺族で、軍人・軍属裁判や靖国神社合祀取り下げを求める「ノー！ハプサ(合祀)裁判」の原告として、日本による植民地支配とその責任を問い合わせています。李熙子さんは、金学順さんの晩年には病院に付き添い、入院した際には泊まり込んで見守りました。いまも金学順さんの命日には、ソウル近郊の「望郷の丘」へのお墓参りを欠かしません。今年のメモリアル・デーは、韓国に住む李熙子さんとオンラインでつなぎ、金学順さんとの思い出をうかがいます。

協力：韓国植民地歴史博物館

プログラム

- 「金学順さんの足跡」(wam保管資料から／10分)

●「金学順さんと私」

お話：李熙子さん(太平洋戦争被害者補償推進協議会代表)

通訳：野木香里さん(韓国植民地歴史博物館 専任研究員)



【プロフィール】

李熙子さん：1943年、韓国・江華島生まれ。日本軍に徴用された父親とは生後13ヶ月で生き別れ、1989年から太平洋戦争犠牲者遺族会に参加して父の死亡記録、合祀記録に出会う。2001年、父の合祀取消しを求めて東京地方裁判所に提訴。同時に設立された太平洋戦争被害者補償推進協議会の代表として、日本や韓国で提起された朝鮮人の強制労働に関わる数多くの裁判を実質的に支えている。



「望郷の丘」に立つ金学順さん(右)と李熙子さん(1993年)。「望郷の丘」は日本の植民地支配のもとで祖国を離れた海外同胞のためにつくられた国立共同墓地でソウル近郊にある。金学順さん、黄錦周さん、宋神道さんなど、日本軍性奴隸制のもとで被害を受けた女性たちの多くもこの「望郷の丘」に眠る。李熙子さんは、ここに父の墓地を確保してあるが、靖国神社が合祀を取り下げないために名を刻めていない。